

設置の趣旨等を記載した書類  
(目次)

1	設置の趣旨及び必要性	P. 2
2	(修士課程の設置の場合) 修士課程までの構想か、又は、博士課程の設置を目指した構想か。	P. 6
3	研究科、専攻等の名称及び学位の名称	P. 6
4	教育課程の編成の考え方及び特色	P. 7
5	教員組織の編成の考え方及び特色	P. 11
6	教育方法、履修指導、研究指導の方法及び修了要件	P. 14
7	特定の課題についての研究成果の審査を行う場合	P. 18
8	施設、設備等の整備計画	P. 18
9	基礎となる学部(又は修士課程)との関係	P. 20
10	入学者選抜の概要	P. 20
11	取得可能な資格	P. 22
12	「大学院設置基準」第2条の2又は第14条による教育方法の実施	P. 22
13	2以上の校地において教育研究を行う場合の具体的計画	P. 22
14	社会人を対象とした大学院教育の一部を本校以外の場所(サテライトキャンパス)で実施する場合	P. 22
15	多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合	P. 22
16	通信教育を行う課程を設ける場合	P. 23
17	管理運営	P. 23
18	自己点検・評価	P. 24
19	認証評価	P. 24
20	情報の公表	P. 24
21	教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	P. 24

## 獣医学研究科

### 1 設置の趣旨及び必要性

#### ア 研究科設置の理由及び必要性

2022年4月より開設を計画する新大学獣医学研究科は、昭和30年（1955年）大阪府立大学大学院農学研究科獣医学専攻修士課程（2年制）、昭和39年（1964年）同大学大学院農学研究科獣医学専攻博士課程（3年制）の設置を端緒とする。昭和52年（1977年）の獣医師法の改正によって昭和53年（1978年）入学生から修業年限6年で獣医師国家試験受験資格が与えられることになり、いわゆる4+2年の修士課程積み上げ方式が実施された。昭和59年（1984年）度入学より6年一貫制の学部教育を開始し、これに合わせて平成2年（1990年）より新制度による大学院農学研究科獣医学専攻では4年制の博士課程を開始した。その後、平成12年（2000年）には大学院重点化に伴い農学生命科学研究科獣医学専攻に変更、さらに、地方独立行政法人の下で再編を重ね、平成17年には生命環境科学研究科獣医学専攻となり現在に至る。この間、我が国の重要な検疫拠点である関西国際空港に近接するりんくう地区へキャンパスを移転し、最新の設備を有する学舎のもと獣医臨床センター及び動物科学教育研究センターを併設することにより教育・研究を充実させ、近畿圏を中心に高度な専門性を有する獣医師・獣医学研究者の輩出に貢献してきた。

獣医学は動物の医療を根幹とする総合的な動物科学であり、ウイルスや細菌といった病原体からヒトに至るまで、さまざまな生命体の構造・機能を分子、細胞、組織、個体レベルで探求する生命科学の基盤としての側面を併せ持つ。様々なストレスにあふれる現代社会において、かつてペットと呼ばれた動物が伴侶動物として家族の一員となるに伴い、動物医療の高度化が求められている。国際交流の活性化に伴うヒトや動物の移動と物流の増大に起因する新興・再興感染症や人獣共通感染症の脅威、食用動物の多頭飼育に基づく動物由来感染症の増大、バイオテクノロジーを用いた畜産物の生産性の効率化や新薬の開発、またそれら食品・医薬品の安全性評価など地域社会の福祉や安全性にかかわる多様な問題が顕在化している。これらの諸問題に対応するためには地域社会のみならず、国際社会との連携が必須であり世界的な視野に立ち解決を求められる課題が急増している。21世紀に入り、ヒト、動物及び環境の健康と健全は3者が相まって初めて成立するというOne Healthの概念が提唱され、獣医学への期待は益々高まってきている。それゆえ、獣医学領域を取り巻くこれら諸問題に取り組み、解決できる世界に通用する高度専門家・研究者・教育者の養成が社会から求められている。

表1に示すとおり、大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻では過去5年間で概ね13名の大学院入学定員を満たしている。特に大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻の特徴として獣医学を履修した一般学生のみならず、アジアを中心とした国々から獣医学の枠を超えて国費、私費を含む多くの留学生や大阪という地の利を生かし

多くの社会人を大学院に受け入れていることが挙げられる。さらに新大学設置後は、コース制に基づく教育に特徴を持たせる。動物構造機能学コースでは、動物科学、生命科学の高度研究者を育成し、獣医環境科学コースでは、人獣共通感染症と食の安全の高度研究者や専門家を育成し、獣医臨床科学コースでは高度獣医療の専門家を育成する。獣医環境科学コースでは、開講する全ての講義を英語で学べる体制を整えたことで、さらに多くの大学院生が国内外から集まることが期待される。

表1. 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻の過去5年間の大学院入学者数（〔 〕内は定員数を示す）

年度	一般	社会人	外国人（国費と私費）	合計[13]
2016	2	2	6（私費4名）	10
2017	3	5	0	8
2018	3	9	1	13
2019	2	9	2（私費1名）	13
2020	4	6	3（私費2名）	13

表2は大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻における過去5年間の学位取得者数を示している。外国人は母国に帰国し、また、社会人はそれぞれの所属先に戻り活躍している。一般での修了生は、公的機関、大学等の研究職、民間企業の研究職、公務員や臨床獣医師として活躍するなど国内のみならず国際社会においても大きく貢献し、高い評価を得ている。それゆえ、今後も13名の大学院入学定員が十分維持されることが考えられる。なお、「学生の確保の見通し等を記載した書類」のからも、本研究科においては、長期的かつ安定的に学生を確保することができることが分かる。

表2. 大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻の過去5年間の学位取得者

	一般	社会人	外国人	合計
2015年度	5	4	0	9
2016年度	9	1	5	15
2017年度	2	3	2	7
2018年度	1	9	4	14
2019年度	2	2	5	9

本研究科は、前身となる大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻から長年大学院教育を実施してきた実績に加え、関西国際空港に隣接し、アジアをはじめとする海外との研究交流に有利な立地条件を備えており、アジアを中心とした国々から訪れている多数

の留学生が在学するなど、獣医学領域における世界的な研究教育拠点として、地域貢献の任を果たしつつ日本を含む国際社会の重要課題に対応できる獣医師の養成や地域および国際社会の要請に応じてグローバルに活躍できる人材の育成が期待されている。従来の獣医学は、畜産振興を目的とした農学の1分野として位置づけられていた。しかし、遺伝子改変技術の進歩など動物バイオを基盤した創薬研究も日々進歩し、ペットは伴侶動物として位置づけられヒト医療と同様、高度獣医療が求められ、人獣共通感染症対策も医学との連携が求められ、獣医学はもはや農学の1分野ではなくなっている。それゆえ、近畿圏で唯一であり、西日本を代表する獣医学部を持つ大阪公立大学に、大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻を継承して、獣医学の教育・研究を実施する大学院を独立した獣医学研究科として設置する意義は極めて大きい。大阪府立大学大学院生命環境科学研究科では、3年制の応用生命科学専攻と緑地環境科学専攻と同じ傘の下に属していたが、獣医学専攻は4年制と教育体系が異なっている。さらに、獣医学と応用生命科学や緑地環境科学とは学問領域も異なり、獣医学研究科として独立することにより、4年制の教育体系の中で進歩が著しい動物バイオ、家畜衛生・食の安全・人獣共通感染症や高度獣医療の分野に特化した教育・研究をより推進することが期待できる。さらに、最先端の科学技術動向に応じた他機関との教育・研究連携を迅速に進めることも容易となり教育レベルの向上が期待できる。

#### イ 人材養成の方針及びディプロマポリシー

大学院では、学術の理論及び応用を教授研究し、その深奥をきわめ又は高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与することを目的とする。21世紀に入り獣医学に対する社会の期待は益々増大して来ている。例えば、少子高齢化社会における愛玩動物の重要性、技術革新に伴う産業界における動物科学を基盤とした研究者の需要や人獣共通感染症対策や食の安全に対する貢献などがある。このような背景から、本研究科では、動物医療を中心とし、動物生命科学から食の安全や人獣共通感染症等、いわゆる公衆衛生分野まで包含する学際的な研究・教育を行い、社会的要請が増加している動物バイオメディカル関連、食の安全及び人獣共通感染症を含めた獣医公衆衛生及び動物衛生、病態動物の診断・治療・予防などの分野において、幅広い視野と深い洞察力、及び高い倫理観を持ち、独創的指導能力を発揮できる国際的な専門家を育成することを目指す。特に、動物構造機能科学分野では、産業界やアカデミアで求められる高度研究者を、獣医環境科学分野では、人獣共通感染症、家畜衛生や食の安全の分野で活躍できる高度研究者、あるいは高度専門的職業人としての能力を持つ人材を、獣医臨床科学分野では、愛玩動物に対するエビデンスに基づく獣医療に精通した高度専門的職業人を養成することを目指している。

そのために、本研究科は以下の教育目標を掲げる。

(1) 動物医療に加え、動物バイオや感染症対策を含めた公衆衛生領域にかかわる科学技術を修得し、生命科学に関する問題に柔軟に対応できる研究者としての能力に加え、獣医学を

基盤にしたより高度な知識と技術を有する指導者としての能力を培う。

(2) 自然科学領域における幅広い視野と高い倫理観を備え、独創的で問題解決能力に優れた研究者・技術者としての能力を培う。

(3) コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を身に付け、国際的に活躍できる能力を培う。

獣医学専攻博士課程は上記本研究科の人材育成の方針・目的・教育目標に基づき、以下の能力を身に付けた上で、所定の単位を習得し、研究内容、研究発表能力、質疑応答能力に基づいて学位論文が審査され、最終試験に合格した者に博士（獣医学）の学位を授与する。

#### ディプロマ・ポリシー

1. 獣医科学及び関連領域に関わる高度な専門性、深い学識を有している。
2. 自然科学領域の幅広い知識と高い倫理観を有し、諸問題に論理的かつ柔軟に対応できる。
3. 自ら近未来の獣医学的課題を想定でき、独創的な発想に基づき問題解決に向けた立案ができる。
4. 英語でのコミュニケーション能力を有し、アジアをはじめとする国際社会でリーダーとして活躍できる。

#### ウ 修了後の進路

動物生命科学を分子から個体レベルで理解できる高度研究者や高度獣医療に貢献できる高度専門的職業人、感染症対策や食の安全に貢献できる高度研究者及び高度専門職業人は社会からの需要も大きく、企業、臨床獣医師、公務員など様々な分野で活躍が期待されている。それゆえ、卒業後の進路として、国公立大学の獣医学、農学、医学、薬学系の教員、国公立の研究機関の研究員、行政職等の公務員獣医師、製薬及び食品系の民間企業の研究者・管理職や小動物、大動物臨床の獣医師等がある。

#### エ 研究対象とする中心的な学問分野

研究対象とする中心的な学問分野として、獣医内科学、獣医外科学、獣医放射線学、特殊診断治療学、獣医再生医療学、獣医繁殖学、獣医微生物学、獣医公衆衛生学、獣医感染症学、獣医国際防疫学、獣医寄生虫学、毒性学、獣医解剖学、獣医病理学、実験動物学、統合生理学、応用薬理学や細胞分子生物学等がある。

小動物から大動物に至る様々な疾病に対して新たな診断法、治療法や予防法の開発研究、分子、細胞、個体レベルで動物や人で起こりうる様々な疾病の新規治療法の開発を目的とした病因機構の解明や国内外の人獣共通感染症や食の安全に関する研究に新たな発想を取り入れ、課題解決に向けた取り組みができる人材育成を目指すことを教育理念として、以下に示す3つの学問分野に大きく分けることができる。

One Health の概念に基づく (1) 動物科学、生命科学の高度研究者育成を基盤とした動物構造機能学分野、(2) 家畜衛生、食の安全や国内外で問題となる人獣共通感染症の基礎、疫学研究に基づき、診断、治療及び予防法の開発研究を行なう獣医環境科学分野、及び(3) 高度・先端獣医療の専門家育成を基盤とした獣医臨床科学分野がある。先に挙げた中心的な学問分野は、この大分類に基づくものである。また教育課程では、各分野をコースとして区分するコース制をとることにより、学生が 4 年間を通して関連領域に関わる高度な専門性を養う広く深い学びの中で、自ら選択するコースにおいて、どのようなテーマないし課題を探究していくか方向性を明確にさせる。

オ 教育研究上の数量的・具体的な到達目標等

本研究科では、最低取得単位である 31 単位の取得のみならず、原則、国際学会で発表することにより、研究成果をまとめ英語で発表する能力を高めることを目指す「獣医科学演習」に加え、さらに国内での学会又は国際学会に 1 回以上発表することを目指す。また、研究成果について学術論文として自らまとめインパクトファクターがあり PubMed に掲載される英語論文に筆頭著者として 1 報以上の投稿・受理を最低条件とし、2 報以上を目指す。

また、早期修了を目指す大学院生に関しては、国内学会で 2 回以上、国際学会で 1 回以上の発表に加え、筆頭著者として 2 報以上あり、合計インパクトファクターが 5 以上を最低基準とする。

2 (修士課程の設置の場合) 修士課程までの構想か、又は、博士課程の設置を目指した構想か。

・該当なし

3 研究科、専攻等の名称及び学位の名称

ア 研究科、専攻等の名称及び当該名称とする理由

本研究科は、ヒトと動物の生命科学を通じて社会福祉に貢献することを目的とする獣医学を基盤とする研究領域であり、動物医療を中心として動物生命科学領域から公衆衛生学領域まで包含する学際的な研究・教育を行う。従って、研究科の名称を「獣医学研究科」とし、その中に「獣医学専攻」を設置する。

また、獣医学専攻の中に 3 つの分野を設ける。教育課程では、各分野をコースとして開設し、コース制をとる。すなわち、動物構造機能学コース、獣医環境科学コース、獣医臨床科学コースを開設する。

#### イ 学位の名称及び当該名称とする理由

本研究科の教育課程は、動物医療を中心とし、動物生命科学領域から食の安全や人獣共通感染症等、いわゆる公衆衛生学領域まで包含する学際的な研究・教育を行う。ヒトと動物の生命科学を通じて社会福祉に貢献することを目的とする獣医学を修めたものに学位を与える。従って学位の名称を「博士（獣医学）(Doctor of Philosophy (Veterinary Science))」とする。

#### ウ 研究科，専攻等及び学位の英訳名称

研究科の英語名称：Graduate School of Veterinary Science

専攻の英語名称：Department of Veterinary Science

学位の英語名称：Doctor of Philosophy (Veterinary Science)

### 4 教育課程の編成の考え方及び特色

#### ア 教育課程の編制方針（カリキュラムポリシー）

ディプロマポリシーに掲げる能力を修得させるため、以下の教育課程を提供する。また、各科目の学修成果は、定期試験、レポート、授業中の小テストやプレゼンテーションの内容（レベル、スライドのわかりやすさ、発表の論理性「背景、目的、方法、結果、考察等」、質問に対する回答が適切かつ論理的に行なわれていたか）を総合的に評価することとし、その評価方法については、授業内容の詳細とあわせてシラバスにおいて科目ごとに明示する。本研究科における教育課程の編成方針は次のとおりである。

#### カリキュラム・ポリシー

- 1) 博士（獣医学）に必要な基盤となる能力を見つけるための内容を学習する授業科目、専門性をより高めるための分野ごとの授業科目を編成する。
- 2) 大学院共通教育科目の必修科目として、国際舞台で活躍する研究者としての動物福祉や研究倫理の醸成を目的とした授業科目を編成し、学生の自主性に基づき、幅広い視野を持つための授業科目を編成する。
- 3) 自ら課題を想定し、独創的な発想に基づく問題解決能力と論文執筆能力を修得するための授業科目を編成する。
- 4) 英語力を修得し、英語でのプレゼンテーション能力を高め、グローバルに活躍できる人材育成のための授業科目を編成する。

これらに加え、各コースにおける教育課程の編成方針は次のとおりである。

- ・動物構造機能学コースでは、実験動物医学専門医資格や日本獣医病理学専門家協会会員資格の修得を目指す者に対して、受験に向けた独自の教育・研修プログラムを提供する。

- ・獣医環境科学コースは、食の安全・人獣共通感染症の専門家を育成するためのインターナショナルコースとして開講し、全ての講義を英語で行う。
- ・獣医臨床科学コースでは、獣医臨床科学分野の専門家として地域獣医療を牽引できるリーダーとなりうる人材を養成するため、獣医学部附属獣医臨床センターでの獣医臨床の実践を通して高度な獣医臨床能力を養う高度臨床実践トラックを設置する。

さらに、国内外から第一線の研究者を招聘し、獣医科学、自然科学及関連領域の最先端の専門知識を修得することを目的に各コースで特別講義を開講する。また、獣医学の専門性を必要とする国内外の現場での演習を通じてより広い視野を培うことを目的に、国際、国内インターンシップを実施し、国際舞台を含む社会での実践力を養成する。

#### イ 教育課程の概要及び特色

本研究科の教育課程の概要は、動物構造機能学コース、獣医環境科学コース、獣医臨床科学コースの3つのコースに分かれる。大学院共通教育科目、獣医学研究科共通科目、各コースの専門科目から構成され、必修科目及び選択科目を開講し、コースに関わらず必修科目は23単位、選択科目から8単位以上の取得を必須とし、それぞれの分野で活躍できる専門家の養成を目指す。必修科目では、博士（獣医学）に必要な基盤となる能力を見つけるための内容を学習する。3コース共通の選択科目では幅広い視野を持つための学びの場として、受講生の自主性にに基づき、幅広い視野を持つための学ぶ場を提供する。一方、コース科目は、各コースでのそれぞれの分野の専門性をより高めるための講義を選択科目として配置する。

共通の必修科目として、研究者として必要な倫理観を身につける「研究公正 B」、グローバルに活躍できる人材育成を目指し「アカデミックイングリッシュアドバンス」、さらに、研究者として必要な研究の計画、研究の遂行、結果をまとめ考察し、口頭あるいは論文で発表するためのスキルを高めるための科目を配当する。一方、コース科目では動物構造機能学分野、獣医環境科学分野と獣医臨床科学分野の専門性をより高めるための講義科目を配当する。共通の選択科目は、獣医学の枠や分野の縛りのない学びの場を提供することを目的とする。具体的には、自然科学におけるエポックメイキング的な大発見やその背景を学ぶ自然科学特論、英語力を基礎から身につけるための「アカデミックイングリッシュ基礎」、データ解析に不可欠な「統計学」、それぞれの分野のエキスパートを学外から招聘し最先端の研究成果を学ぶ特別講義や企業家を目指す「イノベーション創出型研究者養成」などがある。

各コースの選択科目、3コース共通の選択科目を履修することにより、「ディプロマポリシー1に掲げている「獣医科学及び関連領域に関わる高度な専門性、深い学識を有している。」ことに対応する。コース選択科目、大学院共通科目、及び獣医学研究科共通科目を履修することにより、「ディプロマポリシー2に掲げている「自然科学領域の幅広い知識を有し、諸問題に論理的かつ柔軟に対応できる。」能力を身につけさせる。特に「獣医科学特別演習1-3」、「獣医科学特別研究1、2」、「獣医科学演習」及び「獣医科学ミニレビュー」で、ディ



プロマポリシー 3 に掲げている「自ら近未来の獣医学的課題を想定でき、独創的な発想に基づき問題解決に向けた立案ができる。」能力を身につけさせる。「アカデミックイングリッシュ基礎」及び「アカデミックイングリッシュアドバンス」、「国際・国内インターンシップ」及び「獣医科学演習」でディプロマポリシー 4 に掲げている「英語でのコミュニケーション能力を有し、アジアをはじめとする国際社会でリーダーとして活躍できる」人材育成を行なう。

なお、専門科目・大学院共通教育科目が各年次の前期（春夏学期）、後期（秋冬学期）、通年のいずれかに配当されており、履修年次も学生の希望に応じて決定することができる。履修学期（前期、後期）の入れ替わりについては、修得内容への影響は特段認められないことから、春入学、秋入学いずれにおいても教育課程の体系は維持することができる。また、博士課程の研究指導科目に関しても、配当年次の入れ替えがなく、各年次の前期（春夏学期）と後期（秋冬学期）の入れ替えのみであれば、春入学、秋入学のいずれにおいても教育課程の体系は維持することができる。また、春入学及び秋入学の大学院生はともに同じ科目を合同で受講できるため、年間授業回数増加などの教員への負担は基本的にない。春入学及び秋入学の大学院生の修了までのスケジュール表を資料として添付する。また、入学時期は 4 月と 10 月の 2 回設けているが、それぞれの定員は無く 1 年間で 13 名の定員とする。

#### 【資料 1 獣医学研究科獣医学専攻 博士課程履修スケジュール】

#### 【教育課程の編成の具体的な内容・特色】

コースに関わらず全ての学生が大学院共通必須科目の「研究公正 B」を通じて、生命倫理、動物倫理及び研究倫理の重要性を学ぶことができる。また、指導教員による「獣医科学特別研究 1」と「獣医科学特別研究 2」による研究指導に加え、1 年前期に「獣医科学特別演習 1」として研究の背景、方法及び研究が目指すゴールについて討議し、第 3 者の意見を求める機会を提供する。3 年前期には「獣医科学特別演習 2」として中間発表会を開催し、研究の進捗状況について講師以上の教員と議論する機会を設ける。さらに、「獣医科学演習」を必修科目として在学中に最低 1 回の国際学会等での発表を義務づけ、また、「アカデミックイングリッシュアドバンス」では、英語で発表・議論する能力を培い、英語での発表と討論の場を経験させ、論理的思考力、英語による論理的なプレゼンテーション能力及び学位論文作成に必要な高度な表現力を身につけることを目指す。さらに、最終学年において「獣医科学特別演習 3」として博士論文としてまとめたものを全教員の前で発表し、質疑応答を通じて良い博士論文にまとめ直すための機会を提供する。

動物構造機能学コースでは、医薬品、化粧品、食品メーカーなどにおける専門職あるいは教育・研究職につくことを希望する者に対し、動物の生命維持並びに疾病発症に関わる形態的・機能的仕組みに関する深い知識を修得させる。さらに、ヒトの健康に関わる諸問題の探索、分析、解決に必要な能力を身につけた専門家を育成するため、多種多様な生命現象の探求に必要な研究環境を提供し、次の通り教育課程を編成する。まず共通の必修科目「研究公

正 B) を通じて、ライフサイエンスのあらゆる分野で必要な、研究公正、研究倫理等の概論的教育を行う。続く応用（コースの選択科目）として、「実験動物学特論」、「分子病理学特論」、「ニューロサイエンス特論」、「病態機能学特論」、「機能形態学特論」、「分子細胞生物学特論」共通選択科目として「統計学」など、系統的に専門性を高めるとともに疾病応用性、学際性の高い教育を提供し、科学的素養を備えた専門家を養成する。さらに実践として、「獣医科学特別研究」を通じて知識を統合的に定着させるとともに、専門家に必要な企画力を涵養する。また、未開拓な先端分野に対応できる高度な専門的知識とコミュニケーション能力を養成することにより、不確実性のある事象への高い対応力を身につけ、将来にわたり継続的に自己成長するための基盤とする。大阪府立大学の 21 世紀研究所にて設置されているバイオメディカルファシリティセンター、動物科学教育研究センター、大型先端機器解析施設を新大学においても併せて活用することで、所属する研究室の枠を超えて、研究活動を強力に推進できる環境を提供する。

獣医環境科学コースでは、全ての授業を英語で学び、単位取得できるインターナショナルコースとして食の安全、人獣共通感染症及び家畜衛生の分野でグローバルリーダーとして活躍できる人材の育成を目指す。また、バーチャル研究所である食の安全科学研究センターやアジア健康科学研究所と連携し、海外の大学や研究機関、国内の行政機関及び産業界とも積極的に連携し、研究・教育活動を展開する。具体的には、次の通り教育課程を編成する。

「国際・国内インターンシップ」において、人獣共通感染症や食の安全に関わる国内外の種々の職場を体験し、将来に対する選択肢と自己の研究展開の可能性を広げることを目指す。コースの選択科目として、「基礎微生物学特論」、「分子細菌学特論」、「分子ウイルス学特論」、「分子寄生虫・免疫学特論」、「感染症制御学特論」、「食品科学特論」等の講義を英語で行い、食の安全、人獣共通感染症及び家畜衛生の専門家として必要な知識を習得させる。さらに、本研究科の共通の選択科目として「獣医環境科学特別講義 A」や「獣医環境科学特別講義 B」を開講し、外部講師による食の安全や人獣共通感染症に関わる最先端の研究成果に触れることにより、よりレベルの高い研究遂行能力を身につける機会を提供する。バーチャル研究所である食の安全科学研究センターやアジア健康科学研究所の活動を通じて大学院生の教育、研究支援に積極的に関わって行く。これらのプログラムを遂行することにより、国際社会が求める食の安全・安心、及び人獣共通感染症のエキスパートを学内、及び国内外の専門家とともに育成する。

獣医臨床科学コースでは、本研究科の One Health の理念に基づき、様々な動物の多様な疾患について深い知識を獲得し、その病態解析法、診断法あるいは治療法について新たな提唱ができる専門家を育成することを目的とする。そのため、動物及びヒトの医療へ還元可能な研究を実施できる研究環境を提供し、次の通り教育課程を編成する。「国際・国内インターンシップ」の履修により、国内外の獣医臨床に係わる現場を体験することで、自己の専門分野と実社会との関連性並びに実臨床における課題を理解し、幅広い視点から研究を発展させる。コースの選択科目として「先端獣医外科学特論 1」、「先端獣医外科学特論 2」、「先

端獣医内科学特論 1」、「先端獣医内科学特論 2」、「先端獣医内科学特論 3」、「先端獣医臨床放射線学特論」、「大動物臨床学特論」、「生産獣医療学特論」等の講義を実施し、動物医療に密接に関係した高度研究能力やその研究をヒト医療へ応用するための能力を涵養する。獣医臨床センターとその連携施設などの動物医療現場では、あらゆる動物種の様々な疾病についての病態解明、診断法、治療法や予防法などに関する研究を実施、並びにその研究成果の検証と応用が可能である。さらに、「獣医臨床科学特別講義 A」及び「獣医臨床科学特別講義 B」を開講し、外部講師による臨床獣医学に関連する先端的研究成果に触れることで、獣医臨床に関連する高い課題解決能力を身につける機会を提供する。また、地域獣医療のリーダー的人材を育成するため、高度臨床実践トラックを設置し、「伴侶動物診療学特論」を開講することで、獣医臨床センターでの実践的な獣医臨床プログラムを通して高いレベルの獣医臨床能力を養う。

学修成果の評価については、講義科目、実習科目、演習科目でそれぞれ以下のように行なう。講義科目については、授業に対する積極的な取り組みを平常点、講義終了後に課す試験、あるいはレポートの点数と合わせて総合的に評価し 60 点以上を合格とする。獣医科学特別研究では、研究計画、研究への取り組み、結果の考察等、日頃のディスカッションを通じて総合的に評価し 60 点以上を合格とする。獣医科学特別演習、獣医科学演習や獣医科学ミニレビュー等の演習科目については発表内容、スライドやレジメの分かり易さ、論理性や質疑応答等を含め総合的に判断し 60 点以上を合格点とする。国際・国内インターンシップでは、事前・事後発表会での内容を総合的に評価し 60 点以上を合格とする。また、博士課程の単位数については、大学院設置基準（第 15 条）に基づいて定められた大阪公立大学における 1 単位当たりの時間数及び単位数設定の最小単位に関する方針に従って、決定した。

以上の教育プログラムに基づき、高い倫理感を持ちグローバルに活躍できる高度獣医学研究者、高度専門家の育成を目指す。

## 5 教員組織の編成の考え方及び特色

### ア 教員組織編成の考え方

本研究科の教員組織は、本研究科の設置趣旨及び特色並びに教育課程編成の考え方などを踏まえて、専任教員を中心に編成する。学位保有状況については、研究指導科目を担当する教員だけでなく、全教員が博士の学位を保有している。教育課程の編成のとおり、教育科目を「動物構造機能学」、「獣医環境科学」、「獣医臨床科学」の 3 つのコースに分類し、責任を持ってそれぞれのコース科目を担当する主たる専任教員を動物構造機能学分野、獣医環境科学分野、獣医臨床科学分野に配置する。

本研究科は、小動物から大動物に至る様々な疾病に対して新たな診断法、治療法や予防法の開発研究、分子、細胞、個体レベルで動物や人で起こりうる様々な疾病の新規治療法開発

を目的とした病因機構の解析や国内外の人獣共通感染症や食の安全に関する研究に新たな発想を取り入れ、課題解決に向けた取り組みができる上記能力をさらに深化させるとともに動物生命科学領域における幅広い専門知識と技術及び総合的な視野を養成し、独創的かつ柔軟性に優れた自立的な研究能力、科学者としての高い倫理観、論文作成能力を持つ科学者・技術者の育成を目指す。

こうした能力を有する人材を育成するために、教育上、研究上、または実務上優れた知識、能力、及び実績を有する専任教員を、合計41名（教授13名、准教授19名、講師2名、助教7名）を配置する計画である。なお、これらの教員は各分野に所属し、各コースにおいて教育・研究に携わる。また、専任教員は、研究科教授会、研究科教員会議、研究科教育運営委員会等の研究科内に設置した各種委員会等の組織を通じて、教育運営、管理運営に責任をもって取り組む。

#### 【動物構造機能学分野】

遺伝子・タンパク質・細胞小器官・細胞・組織・個体における動物種差を念頭におき、動物の生命維持並びに疾病発症に関わる仕組みに関する研究を形態学的及び機能学的観点から統合的に遂行するために必要な知識・技術を教授する。さらに、最新の動物バイオテクノロジーに関する情報並びにヒトの健康に関わる諸問題を探索、分析、解決するために必要な知識・技術など研究指導を通じて教授する。

#### 【獣医環境科学分野】

生命環境の健全性、産業動物や伴侶動物と人における健康の維持・向上を目指し、食の安全、人獣共通感染症及び家畜衛生に関する最新の知見、情報を教授する。さらに、獣医学的観点から分子・細胞・個体さらには群レベルにおける危害因子の生体への影響と作用機構及びその制御に関して先端技術を駆使した解析評価法を念頭においた研究指導を行う。

#### 【獣医臨床科学分野】

動物疾病の診断、治療及び予防に関わる最新の情報について教授するとともに新たな診断、治療及び予防法の開発に関する研究指導を行う。また、動物の疾病の発生機序並びに病態に関する個体・細胞・分子レベルでの教育・研究から様々な動物及びヒト医療への還元につながる研究指導を行う。

各分野の専任教員は、高度専門獣医療、創薬、動物関連バイオテクノロジー、人と動物の共生と動物の福祉、海外からの種々の動物の搬入に伴う病原体の侵入対策並びに食品の安全、人獣共通感染症を含む環境由来危険因子の評価等、拡大しつつある獣医学関連領域だけでなく、医学、工学等関連分野との連携を見据えた研究指導を行う。一部の専門性の高い科目については、その学問分野において高度な知識と経験を有する他機関の専門家を非常勤

講師として配置する。

#### イ 教員組織編成の特色

上述のように、本研究科における中心的な学問領域は、One Health の概念に基づく(1)動物科学を基盤とした動物構造機能学、及び(2)食の安全や国内外で問題となる人獣共通感染症の基礎、疫学研究に基づく診断、治療及び予防法の開発研究に関わる学問分野、(3)高度・先端獣医療学である。(1)を主に担当するものとして動物構造機能学分野を、(2)を主に担当するものとして獣医環境科学分野を、(3)を主に担当するものとして獣医臨床科学分野を編成する。各分野に配置されている研究グループは表の通りである。

動物構造機能学分野では、専門医等の資格（実験動物医学専門医、日本獣医病理学専門家協会会員）取得のための受験に向けた教育・研修プログラムを提供するべく、実験動物医学専門医、生殖発生毒性専門家、実験動物技術指導員、日本獣医病理学専門家協会会員などの資格を有している教員を配置する。

獣医環境科学分野では、食の安全・人獣共通感染症の専門家を育成するためのインターナショナルコースとして開講するため、全ての講義に英語で授業を行える教員を配置する。

獣医臨床科学分野では、高度・先端獣医療学に関わる教育を遂行するべく、日本獣医麻酔外科学会の委員会（整形外科委員会、軟部組織外科委員会、麻酔・疼痛管理委員会）の委員を勤める教員を配置する。

さらに、獣医科学、自然科学及び関連領域の最先端の専門知識の修得に加えて世界に通用する高度専門家・研究者・教育者を養成するべく、各コースで開講する特別講義に国内外から第一線の研究者を招聘する。食の安全科学研究センターやアジア健康科学研究所とも連携し産業会との連携もとりながら研究成果の社会実装に向けた取り組みも積極的に行なう。

#### 各分野に配置された研究グループ

分野名	研究グループ名		
動物構造機能分野	獣医解剖学	獣医病理学	実験動物学
	統合生理学	応用薬理学	細胞分子生物学
環境科学分野	毒性学	獣医公衆衛生学	獣医免疫学
	獣医微生物学	獣医感染症学	獣医国際防疫学
臨床科学分野	細胞病態学	獣医放射線学	獣医繁殖学
	獣医内科学	獣医外科学	特殊診断治療学
	獣医臨床センター		

#### ウ 専任教員の年齢構成

完成年度における専任教員の年齢構成については下表のとおり、本研究科における多様な学術的分野における教育研究水準を維持、向上し得る体制になっている。専門性の高い獣

医学教育を、十分な知識と技術を有し、教育手法に長けた教員によって教授することが、この配置の主な理由である。

また本研究科の専任教員のうち完成年度までに定年に達する教員が6名いる。そのうち4名は、担当する授業科目が主要科目であり、かつ、専門分野の特殊性等から同一専門分野の後任を直ちに確保することが困難である。それゆえ、本法人で定める「定年退職する教員を特例として新大学で勤務する教員として雇用する場合の取扱いについて」を根拠に、定年に達した後も特任教員の身分で主要科目を担当する専任教員として完成年度まで雇用し、教育の実施に支障のないよう配慮する。

なお、定年後雇用する教員の後任となる教員は、教員構成のバランスを考慮し計画的にその確保に努めることとしており、本研究科の教員組織の継続性に問題はない。

【資料2：定年退職する教員を特例として新大学で勤務する教員として雇用する場合の取扱いについて】

専任教員の年齢構成表

職名	29歳以下	30～39歳	40～49歳	50～59歳	60歳以上	計
教授				4	9	13
准教授		1	7	7	4	19
講師			2			2
助教		2	2	3		7
計		3	11	14	13	41

## 6 教育方法、履修指導方法及び修了要件

### ア 教育方法等

ディプロマポリシーに掲げた能力を修得するため、「獣医科学特別研究」、「獣医科学特別演習」、「獣医科学ミニレビュー」や「アカデミックイングリッシュアドバンス」などを共通必修科目として履修させる。さらに、学外非常勤講師による補完的な特別講義を通じて、広がりを見せる獣医学の学際領域への興味と考え方の基礎を修得させる。必修科目の国際・国内インターンシップでは、日本人学生には海外で研修を行なうことでよりグローバルな視点でのもの考え方や英語でのコミュニケーション能力を有する人材育成を、外国人留学生には日本国内で研修を行なうことにより、日本の現状を学ぶ機会を与え、将来の就職先となりうる日本企業でも活躍できる人材を育成する。

さらに、動物構造機能学分野では、病態解析、生命現象の解明や疾患モデル動物の開発を通じて、獣医学、医学及び関連する生命科学分野において基礎・応用研究のリーダーとなる研究者を育成する。獣医環境科学分野では、英語で授業を行う選択科目を提供し、人獣共通

感染症や食の安全の分野でグローバルに活躍できるエキスパートを育成する。獣医臨床科学分野では、臨床獣医学に関する先端的な内容を教授するための選択科目を提供するとともに、より実践的で高度な臨床能力を養うための臨床重点コースを設置し、地域獣医療のリーダーとなる人材を養成する。

授業の形式については、その内容に応じ、講義、演習、実習により行い、ゼミ、セミナー、研究発表、論文作成等の一連の研究指導を通じて、高い専門性と幅広い科学の知識を備えた高度な獣医師及び獣医科学領域で活躍できる研究者を養成する。また、専攻の定員が13名であることから、受講生が最大でも20名程度であり、適切な運営が十分に可能である。また修得すべき能力に応じて配当する年次を設定する。1年次に「研究公正B」、「アカデミックイングリッシュアドバンス」や「獣医科学特別演習1」を履修することにより、早期に英語力を身につけ、高度な倫理観を持ち高度な研究を独創的に展開し、自立的に遂行する能力を身に着ける。その一方、1年次、2年次において、各コースの選択科目を取得し高度な専門的知識を修得する。また研究指導科目を1年次～4年次に配当し、研究を計画、実行、評価、総括するために必要な専門的能力と問題解決能力およびプレゼンテーション能力を4年間かけて修得する。

なお、「国際・国内インターンシップ」に関して、動物構造機能学分野ではノースカロライナ大学（米国）、ノースカロライナ州立大学（米国）、アーカンソー医科大学（米国）、生理学研究所、理化学研究所などを、獣医環境科学分野ではカセサート大学（タイ）、チュラロンコーン大学（タイ）などを獣医臨床科学分野ではコロラド州立大学（米国）、コーネル大学（米国）、国立屏東嘉義大学（台湾）、北海道大学 動物医療センターなどで実施することを想定している。

これらの大学、研究機関とは、本研究科の前進となる大阪府立大学大学院生命環境科学研究科獣医学専攻として、教育研究の連携関係にあり、大阪公立大学大学院獣医学研究科においても、継続して連携関係を取り、安定的に科目を実施できることが確約されている。国内外の獣医学関連の高度な研究施設または高度獣医療施設で現場を体験することにより、英語でのコミュニケーション能力を有し、アジアをはじめとする国際社会でリーダーとして活躍できる能力を身に着け、高度な研究者・専門家として就職するために、種々の職場を体験し、その選択肢と自己の研究展開の可能性を広げることを目的とする。本授業科目の指導者は、実習内容に応じた専門知識と技術を有する大学院生を指導している者が任にあたる。

学生を派遣する前に、事前に派遣機関の受け入れ教員等と実習の具体的内容、到達目標、評価方法、評価基準等の打ち合わせを行ない、本授業科目の目的に合致していることを確認する。実習期間中は、派遣機関の受け入れ教員等と専任の指導教員が連絡を取ることによって、実施状況を把握できる体制とする。成績の評価方法は、派遣機関の受け入れ教員等からの評価、及び実習終了後に学生が提出するレポートの内容により学修到達目標に達したかどうかを専任の指導教員が確認する。

なお、インターンシップへの派遣にあたっては、学生へは傷害保険のほか、自賠責保険への加入を義務とするほか、緊急時の連絡網の整備や国際交流グループとも連携し、健康上の問題や有事に対応できる状況を整備する。

#### イ 履修指導及び研究指導体制

各年度の最初に全学生を対象とした履修ガイダンスを実施し、履修要項等を用いて、授業・研究指導の方法・内容など、一年間の授業・研究指導の計画について説明する。必要に応じて研究指導教員、教務担当職員がシラバスを参考に履修モデルに基づく履修計画の策定を支援する。

また、本研究科では、博士課程の履修指導及び研究指導体制として次の事項を定める。

・指導教員は、本研究科の専任教授とする。本研究科が必要と認めるときは、さらに、本研究科の准教授、講師、助教、特認教授、特任教授、客員教授、特認准教授、特任准教授、客員准教授、特認講師、特任講師、特認助教及び特任助教を指導教員に加えることができる。

なお、本研究科共通の必修科目「獣医科学特別演習 1、2」については、原則、各分野の全教員の出席のもと行なう。「獣医科学特別演習 3」については、原則、本研究科に所属する講師以上全教員の出席によって行なう等きめ細かな指導体制を取る。「獣医科学特別研究 1、2」については、研究指導に関しては、主たる指導教員及び当該研究室の教員による研究指導を行なっていく。さらに、「獣医科学特別演習 1」の終了時から副査候補となる研究補助指導教員とともに複数教員による研究指導体制を敷き、手厚く指導して行く体制を取っている。3年次前期に「獣医科学特別演習 2」を開講し、研究の進捗状況を当該分野全教員で確認し、助言・指導する。さらに、最終学年には「獣医科学特別演習 3」を開講し、より良い博士論文としてまとまるよう助言・指導する。

【資料 1 獣医学研究科獣医学専攻 博士課程履修スケジュール】参照

#### ウ 修了要件

本研究科では、博士課程の修了要件として次の事項を定める。

・「研究公正 B」(1 単位)、「獣医科学演習」(1 単位)、「獣医科学ミニレビュー」(2 単位)、「獣医科学特別演習 1～3」(3 単位)、「獣医科学特別研究 1、2」(14 単位)、「アカデミックイングリッシュアドバンス」(1 単位)、「国際・国内インターンシップ」(1 単位)、及び選択科目 8 単位以上を含む合計 31 単位以上修得しなければならない。「研究公正 B」により、研究者としての高度な倫理観を、「アカデミックイングリッシュアドバンス」にて国際舞台で活躍できる英語力を、「獣医科学演習」、「獣医科学特別演習」、「獣医科学ミニレビュー」及び「獣医科学特別研究」で獣医科学及び関連領域に関わる高度な専門性、論理性、深い学識やプレゼンテーション能力をそれぞれ身につけさせる。その上で、以下の条件を満たしたも



のを修了させる。

1年次、2年次に開講される「獣医科学特別研究1」では、実験440時間、演習40時間を想定していることから8単位を与えることとする。3年次、4年次に開講される「獣医科学特別研究2」では、実験330時間、演習30時間を想定していることから6単位を与えることとする。

・履修要項やシラバスを履修前に公表し、また各学年の始めにガイダンスを実施することで、学修および学位論文に係る評価、修了の認定について、学生に対してその基準をあらかじめ明示し、当該基準に従って適切に行う仕組みとする。

・博士課程を修了するためには、上記の修得要件を満たし、博士論文を提出し審査及び試験に合格することとする。

・博士課程の修了認定を受けようとする者は、博士論文を所定の期日までに研究科長に提出しなければならない。なお、学位論文の審査については、以下オに記載された「学位論文審査体制」のとおりとし、1年間の授業・研究指導計画については、事前に学生に示す仕組みとする。

## エ 履修モデル

【資料3「獣医学専攻 博士課程履修モデル」参照】

## オ 学位論文審査体制

資格審査を3回行い、学位の質保証を行う。第1回審査は、研究の目的・課題設定の妥当性や適切な方法論を設定しているかについての評価・助言を、第2回審査では、研究の進捗状況を審査するとともに、学位取得に向けた今後の研究の進め方について指導・助言を行う。第3回目の審査では、「学位論文提出資格審査」として実施する。

なお、学位論文の審査は、学位論文が提出された後、主査1名及び副主査2名以上の審査委員会を開き、審査委員会での発表・質疑を基に以下の基準で審査を行なう。

- ・学位論文の内容に十分な新規性や独創性が認められ、当該分野の学術的進歩に寄与する。
- ・学位申請者が研究設定能力、研究分野に関連する専門的知識、高い倫理性、語学力などを有し、自立して研究活動を行うに十分な能力を有することが認められる。
- ・獣医学関連分野の査読のある学術雑誌等に博士論文の関連する論文が筆頭著者として公表もしくは受理されている。

最終試験は、非公開で研究科内の教員、学生の前で博士論文発表会を開催し行なう。判定は、論文審査及び最終試験の結果と合わせ、研究科教授会で行なう。

## カ 学位論文の公表方法

博士の学位を授与された者は、1年以内に学位論文の全文をインターネットを介して公表することを課し、大学の学術情報リポジトリで公開すると同時に、大学の図書館、国会図書

館にて公開する。ただし、学位論文全文をインターネットを介して公表できない「やむを得ない事由」（学術雑誌に掲載を予定されている、特許の申請予定があるなど）がある場合は、研究科教授会の承認を得て、全文に代えて論文要旨とは別に要約を公表することができることとする。なお、要約を公表する期間中は別途、印刷製本した博士論文を国立国会図書館と本学図書館で保管することで閲覧に供し、やむを得ない事由が解消した場合は速やかに全文を学術情報リポジトリに公表するものとする。

#### キ 研究の倫理審査体制

獣医学研究科では、農学研究科・理学研究科と共同で研究倫理委員会を設置して審査を行う。ヒト検体を持ちいた研究、個人情報扱う研究、人間を対象としてデータを取得する研究においては、上記研究倫理委員会において研究内容・方法に関する事前審査を行い、個人情報保護や研究対象者へ精神的苦痛を与え無いように配慮されていることを確認、指導する。上記研究倫理委員会は、研究科長及び本研究科の専任教員、学外の研究者及び学識経験者の中から獣医学研究科長が委嘱した者から構成される。【資料 4「大阪公立大学理学研究科・農学研究科・獣医学研究科研究倫理委員会設置要綱」参照】また、動物（生体）を用いる研究については動物実験委員会の承認を得て行う。

#### ク 多様なメディアの活用

- ・該当なし

#### ケ 他大学における授業科目の履修等

研究科において教育研究上有益と認めるときは、学術交流協定を締結している他の大学院の科目を履修させることができる。学生が修得した単位は、本学大学院学則に基づき、15単位を超えない範囲で本学大学院における科目の履修により修得したものとみなすことができる。

#### 7 特定の課題についての研究成果の審査を行う場合

- ・該当なし

#### 8 設備等の整備計画

##### ア 校地、運動場の整備計画

- ・大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類参照

## イ 校舎等施設の整備計画

### 教育研究に使用する施設、設備等

獣医学研究科において教育研究を行う施設、設備については、「大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類」に記載のほか、森之宮キャンパスに新たに建設する新校舎の施設と大阪府立大学のりんくうキャンパスの施設・設備等を継承する次の施設、設備等により実施することから、学生、教員に対して十分な教育研究環境を提供するものである。

なお、全学的な校舎等施設の整備計画については、大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類を参照。

#### 1) 講義室・演習室・研究室等

獣医学研究科では、授業の形態に応じて講義室や演習室等の施設を使用し、専任教員には研究室を割り当て、学部教育と大学院教育を実施する。獣医学研究科における施設概要は次のとおりである。

##### 【施設概要】

- ・講義室 7 室
- ・演習室 5 室
- ・研究室 43 室（教員居室等を含む）
- ・実習室 140 室（実習室、動物飼育室、診察室の他、関連諸室を含む）

#### 2) 実験施設・設備等

獣医学研究科における実験の授業科目は、140 室ある実習室において実施する。

獣医学研究科における実験施設関連・設備等は次のとおりである。

##### 【実験施設・設備等】

##### 獣医学研究科

- ・実習室 140 室  
(設備等) 発光検出装置、タイムラプス生細胞観察顕微鏡システム、共焦点レーザー顕微鏡、透過型電子顕微鏡、走査型電子顕微鏡、光学顕微鏡、高速冷却遠心機、生体分子間相互作用分析装置、フルオロイメージアナライザー、ドラフトチャンバー、質量分析装置、リアルタイム PCR 装置、パルスフィールドゲル電気泳動装置、タンパク質電気泳動装置、レーザーマイクロダイセクション、遺伝子導入装置、液体クロマトグラフィー、ガスクロマトグラフィー、超純水製造装置、純水製造装置 ほか
- ・獣医臨床センター  
超音波診断装置、X 線検査装置、CT 検査装置、MRI 検査装置、放射線治療装置、麻酔関連・手術関連装置、血清学・血液学臨床検査装置 ほか

大学院学生の研究室（自習室）等の考え方について

研究室内に大学院生の居室を確保し、大学院生が研究活動を目的とした自習を行うことができる環境を整える。さらに、カンファレンス室、大学院講義室等の共用部分も会議、講義等で使用していない場合に限り、自習室として活用する。いずれの場合も、教員と大学院生が密にコミュニケーションを取りながら、研究を進められる体制を構築する。

【資料5 校地校舎等の図面】

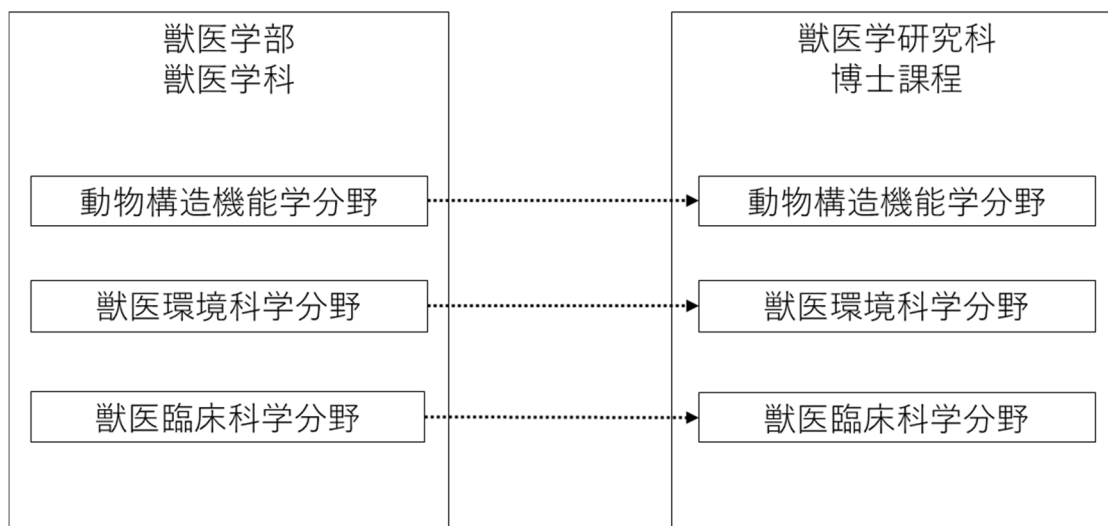
ウ 図書等の資料及び図書館の整備計画

・大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類参照

## 9 基礎となる学部（又は修士課程）との関係

獣医学は動物を基盤とした生命科学を学ぶ学問であり、獣医学研究科に進学する学生は獣医学部の課程を修めた者に加え、医学部、歯学部、薬学部や理学修士、農学修士、工学修士に加え生物系を学んだ学術修士にも門戸が開かれている。

【基礎となる学部との関係】



## 10 入学者選抜の概要

ア アドミッションポリシー

本研究科は、獣医科学及び動物生命科学領域に関する学識・見識・技術を兼ね備え、社会

的要請が増加している創薬や化学物質の安全性評価などのヒト及び動物バイオ関連の動物構造機能学分野、家畜衛生や食の安全及び人獣共通感染症を含めた獣医環境科学分野、疾病を抱える動物の診断・治療・予防などの獣医臨床科学分野の各分野において、幅広い視野と深い洞察力、及び高い倫理観を持ち、アジアをはじめとする国際社会でリーダーとして活躍できる人材の育成を教育理念とする。したがって、本研究科では以下のような学生・社会人を国内外から広く求める。

1. 獣医科学の専門分野を学ぶための十分な基礎学力がある人。
2. 自然科学領域の幅広い知識を持ち、論理的な思考力と自ら学ぶ探求心を備えている人。
3. 将来、国内外の獣医学領域で指導的立場に立つ強い意志とリーダーシップを発揮する意欲のある人。
4. 獣医学分野に携わる人材として豊かな人間性、協調性、国際性と倫理観を備えている人。
5. 研究活動に必要な英語能力とコミュニケーション能力を有している人。

#### イ 入学者選抜の方法と体制

入学者の対象は、一般、社会人、留学生とし、入学者の選抜はそれぞれ英語力と口頭試問によって判定する。英語力に関しては、原則、TOEIC、TOEFL、IELTS の試験の結果に基づき、口頭試問に関しては当該分野の教員 3 名、他分野の教員、それぞれ 1 名の計 5 名からなる入試委員によって審査及び評価を行う。TOEIC での成績が 600 点、それ以外の試験については TOEIC で 600 点相当を合格とする。上記の英語試験を受験できなかった場合は、別途英語の試験を課す。その際、100 点を満点とし 60 点以上を合格とする。口頭試問に関しては、5 名の教員で採点し、100 点を満点とし 60 点以上を合格とする。得られた審査結果は大学院教務委員より研究科教授会に報告し、全体の審議の経た後、最終的に合否が決定する。春入学、秋入学を設け、定員は以下のとおりとする。

- ・一般選抜（春入学）…13 名
- ・一般選抜（秋入学）…若干名
- ・社会人特別選抜（春入学）（秋入学）…若干名
- ・外国人特別選抜（春入学）（秋入学）…若干名

#### ウ 多様な学生の受入

多様な学生を受け入れるために、一般選抜では獣医学士のみならず医学、歯学、薬学等の 6 年制の教育課程を修めたものや農学、理学、工学、保健学等の 4 年制の教育課程を修め、さらに 2 年制の修士課程を修めたもの、及びそれと同等の能力を有すると研究科教授会で判定されたものに受験資格を与える。社会人特別選抜に関しては、上記の条件を満たし、各種の試験研究機関、教育機関及び民間企業などに勤務する研究者、技術者、教員等であって入学後も引き続きその身分を有し、所属する機関の長の承諾を受けているものとする。一方、

外国人留学生については、スカイプ等を用いた遠隔入試を導入し、世界の様々な国から受け入れる体制を整えている。外国人留学生については、春入学、秋入学を問わず、入学後すぐに指導教員が受講科目の選択に関する履修指導を行う。また日本での生活に不慣れな留学生については、指導教員の申請に基づいて日本人学生による留学生チューターを配置する。留学生チューターは留学生に対して日本における生活全般に関するアドバイス等を行う。指導教員は、大学院を修了するまでの間、留学生の日本語能力に配慮した上で指導を行う。

#### 1 1 取得可能な資格

・該当なし

#### 1 2 「大学院設置基準」第 2 条の 2 又は第 14 条による教育方法の実施

・該当なし

#### 1 3 2 以上の校地において教育研究を行う場合の具体的計画

・該当なし【資料 6 獣医学研究科 キャンパスの遷移】

#### 1 4 社会人を対象とした大学院教育の一部を本校以外の場所（サテライトキャンパス）で実施する場

・該当なし

#### 1 5 多様なメディアを高度に利用して、授業を教室以外の場所で履修させる場合

本学では、平常時の対面による授業の実施を原則とするが、大学設置基準第 25 条第 2 項及び本学の学則の規定に基づき、多様なメディアを高度に利用し、同時に双方向に行うことができる遠隔授業を実施できることとすることから、カリキュラムの改善や何らかの理由で対面授業ができなくなり多様なメディアを利用した授業が必要となった場合は、文部科学省の告示の要件等に基づき、実施するものとする。

## 1.6 通信教育を行う課程を設ける場合

- ・該当なし

## 1.7 管理運営

- ・大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類参照

本研究科の管理運営については、「大阪公立大学大学院学則」及び「大阪公立大学教授会規程」、「大阪公立大学研究院規程」に基づき「獣医学研究科教授会運営内規」及び「獣医学研究科教員会議運営内規」を制定し、それに従い審議・運営する。「獣医学研究科教員会議（仮称）」また、教学面に関する組織として、「獣医学研究科教育運営委員会（仮称）」を設けて教学に関する事項について、調整及び審議する。なお、獣医学研究科は一つの専攻（獣医学専攻）のみで構成されているため、研究院会議、研究科会議は設けず、研究科全教員からなる「獣医学研究科教員会議（仮称）」を設けて教授会から委任された事項を審議する。

### (1) 獣医学研究科教授会

教授会は原則月1回の開催とし、教授会の構成員は本研究科に所属する全教授とする。審議事項については次の通りとする。審議事項については次の通りとし、それ以外の事項については獣医学研究科教員会議に委任し、その議決をもって教授会の議決に代えることができることとする。

- ① 教育課程の編成に関する事項
- ② 学生の入学及び課程の修了
- ③ 学位の授与
- ④ 人事委員会への申し出に関する事項
- ⑤ 研究科等の教員体制に関する事項
- ⑥ 兼業に関する事項
- ⑦ 教員の人事上の管理に関する事項
- ⑧ 教員活動の点検・評価の運用に関する事項
- ⑨ 教育研究に関する重要な事項で教授会の意見を聴くことが必要なものとして学長から諮問のあった事項
- ⑩ その他、研究院運営に関する重要事項

### (2) 獣医学研究科教員会議（仮称）

上述のように、獣医学研究科教員会議は、教授会から委任された事項を審議する役割を

担い、教授会で審議する事項（①～⑨）以外の獣医学研究院、獣医学研究科及び獣医学部に  
関する諸問題について審議する。原則月1回の開催とし、研究科教員会議の構成員は獣医学  
研究科に所属する全教員とする。

### (3) 獣医学研究科教育運営委員会

獣医学研究科教育運営委員会は、教学に関する事項について調整及び審議する役割を担  
い、研究科長から任命される委員長が招集して、審議を要する事項がある際に適宜開催する。  
また、構成員は研究科教育運営委員及び各分野から選出する教授または准教授で構成し、教  
育課程の編成と運営に関する事項、教育改革に関する事項及びその他教育と教務に関する  
事項を調整・審議する。なお、獣医学研究科教育運営委員会で扱う事項については、獣医学  
研究科教育運営委員会の議を経て獣医学研究科教員会議に上程し、審議・報告する。

## 1 8 自己点検・評価

- ・大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類参照

## 1 9 認証評価

- ・該当なし

## 2 0 情報の公表

- ・大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類参照

## 2 1 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

- ・大阪公立大学・大阪公立大学大学院設置の趣旨等を記載した書類参照

獣医学研究科において、教育内容等の改善を図るために以下の取組みを行う。完成年度ま  
では、教育目的に則した教育が行われているかを確認しながら、目指す人材の養成に務める。  
完成年度以降には、教育目的やディプロマポリシーに対する達成状況を分析し、カリキュラ  
ムの改善（科目内容、配当年次など）を検討する。このため、開学後は教員の教育能力を改  
善するために、外部講師を招いた講義やセミナーを開催し、講義スキルや研究の最新動向を  
得る機会とし、教員の参加を促す。さらに、講義科目において独自の授業アンケートを実施  
し、授業内容の改善につなげる。



## 獣医学研究科

### 設置の趣旨等を記載した書類 添付資料

資料 1	獣医学研究科獣医学専攻 博士課程 履修スケジュール	P.2
資料 2	定年退職する教員を特例として新大学で勤務する教員として雇用する場合の取り扱いについて	P.6
資料 3	獣医学専攻 博士課程 履修モデル	P.7
資料 4	大阪公立大学理学研究科・農学研究科・獣医学研究科研究倫理委員会設置要綱	P.8
資料 5	大学院生の研究室（自習室）	P.11
資料 6	獣医学研究科キャンパスの遷移	P.15
資料 7	獣医学研究科獣医学専攻カリキュラムマップ	P.16

## 【資料 1】

獣医学研究科 獣医学専攻 博士課程 履修スケジュール

### 【春入学】

		履修・学習の流れ	研究指導の内容
1 年 次	4 月 ～ 3 月	<p><u>博士論文研究計画の策定、専門的知識の修得、並びに学際的視点の涵養</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員の決定</li> <li>・研究課題の決定・研究計画の策定</li> <li>・「研究公正 B」の履修</li> <li>・「アカデミックイングリッシュアドバンス」の履修</li> <li>・「獣医科学特別演習 1」の履修</li> <li>・「獣医科学特別研究 1」の履修</li> <li>・研究分野毎の「専門科目」の履修</li> <li>・「国際・国内インターンシップ」の履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究テーマに関する学生の希望を踏まえ指導教員を決定する。</li> <li>・指導教員は分野専門科目の履修について指導し、学生の希望を踏まえて研究課題・計画を設定する。</li> <li>・研究者として、公正性の高い高度な研究を遂行する倫理観を身につける。</li> <li>・国際舞台で活躍するための英語力を修得し、英語でのプレゼンテーション能力を身につける。</li> <li>・博士論文作成に向けて、文献調査等を実施し、自らの研究内容をより掘り下げて考える能力を身につける。</li> <li>・博士論文作成に向けて、研究指導教員と議論して仮説に対しての研究を遂行し、博士論文をまとめるための研究を行う。</li> <li>・本専攻の各研究分野に関して最先端の専門知識・技能を修得する。</li> <li>・国内外の獣医臨床に係わる現場の体験や大学や研究機関で活動することで、国際舞台を含む社会での実践力を養成する。</li> </ul>

2 年 次	4 月 ～ 3 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「獣医科学特別研究 1」の履修</li>   <li>・「獣医科学演習」の履修</li>   <li>・「獣医科学ミニレビュー」の履修</li>   <li>・研究分野毎の「専門科目」の履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文作成に向けて、研究指導教員と議論して仮説に対しての研究を遂行し、博士論文をまとめるための研究を行う。</li>   <li>・研究成果を、原則、国際学会で発表することにより、研究成果をまとめ発表する能力を高める。また、第三者と討論することにより、ディベート能力を高め、様々な意見を取り入れながら自らの研究をさらに発展させる。</li>   <li>・自身の研究テーマとは異なる内容の学術論文を考察することで、獣医学とその関連領域の知識を幅広く習得・整理し多面的に判断する能力を身につける。</li>   <li>・本専攻の各研究分野に関して最先端の専門知識・技能を修得する。</li> </ul>
3 年 次	4 月 ～ 3 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「獣医科学特別演習 2」の履修</li>   <li>・「獣医科学特別研究 2」の履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文作成に向けて、研究成果を中間報告として発表し、そこで得られる意見を得て、より充実した研究に展開させる。</li>   <li>・博士論文作成に向けて、指導教員と所属教室の教員と議論しながら、より充実した研究活動を行う。</li> </ul>
4 年 次	4 月 ～ 3 月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「獣医科学特別研究 2」の履修</li>   <li>・「獣医科学特別演習 3」の履修</li> <li>➤ 論文題目届の提出</li> <li>➤ 博士論文の提出</li> <li>➤ 論文審査及び最終試験</li>   <li>・修了</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文作成に向けて、指導教員と所属教室の教員と議論しながら、より充実した研究活動を行う。</li>   <li>・これまでの研究成果をまとめ、獣医学専攻全教員の前で発表し、その内容が博士論文としてふさわしいレベルに達しているかについて様々な角度から議論し、審査を受ける。</li> </ul>

【秋入学】

		履修・学習の流れ	研究指導の内容
1 年 次	9 月 ～ 9 月	<p><u>博士論文研究計画の策定、専門的知識の修得、並びに学際的視点の涵養</u></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・指導教員の決定</li> <li>・研究課題の決定・研究計画の策定</li> <li>・「研究公正 B」の履修</li> <li>・「アカデミックイングリッシュアドバンス」の履修</li> <li>・「獣医科学特別演習 1」の履修</li> <li>・「獣医科学特別研究 1」の履修</li> <li>・研究分野毎の「専門科目」の履修</li> <li>・「国際・国内インターンシップ」の履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究テーマに関する学生の希望を踏まえ指導教員を決定する。</li> <li>・指導教員は分野専門科目の履修について指導し、学生の希望を踏まえて研究課題・計画を設定する。</li> <li>・研究者として、公正性の高い高度な研究を遂行する倫理観を身につける。</li> <li>・国際舞台で活躍するための英語力を修得し、英語でのプレゼンテーション能力を身につける。</li> <li>・博士論文作成に向けて、文献調査等を実施し、自らの研究内容をより掘り下げて考える能力を身につける。</li> <li>・博士論文作成に向けて、研究指導教員と議論して仮説に対しての研究を遂行し、博士論文をまとめるための研究を行う。</li> <li>・本専攻の各研究分野に関して最先端の専門知識・技能を修得する。</li> <li>・国内外の獣医臨床に係わる現場の体験、大学や研究機関で活動することで、国際舞台を含む社会での実践力を養成する。</li> </ul>

2 年 次	9月 ～ 9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「獣医科学特別研究1」の履修</li>   <li>・「獣医科学演習」の履修</li>   <li>・「獣医科学ミニレビュー」の履修</li>   <li>・研究分野毎の「専門科目」の履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文作成に向けて、研究指導教員と議論して仮説に対しての研究を遂行し、博士論文をまとめるための研究を行う。</li>   <li>・研究成果を、原則、国際学会で発表することにより、研究成果をまとめ発表する能力を高める。また、第三者と討論することにより、ディベート能力を高め、様々な意見を取り入れながら自らの研究をさらに発展させる。</li>   <li>・自身の研究テーマとは異なる内容の学術論文を考察することで、獣医学とその関連領域の知識を幅広く習得・整理し多面的に判断する能力を身につける。</li>   <li>・本専攻の各研究分野に関して最先端の専門知識・技能を修得する。</li> </ul>
3 年 次	9月 ～ 9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「獣医科学特別演習2」の履修</li>   <li>・「獣医科学特別研究2」の履修</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文作成に向けて、研究成果を中間報告として発表し、そこで得られる意見を得て、より充実した研究に展開させる。</li>   <li>・博士論文作成に向けて、指導教員と所属教室の教員と議論しながら、より充実した研究活動を行う。</li> </ul>
4 年 次	9月 ～ 9月	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「獣医科学特別研究2」の履修</li>   <li>・「獣医科学特別演習3」の履修</li> <li>➤ 論文題目届の提出</li> <li>➤ 博士論文の提出</li> <li>➤ 論文審査及び最終試験</li> <li>・修了</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・博士論文作成に向けて、指導教員と所属教室の教員と議論しながら、より充実した研究活動を行う。</li>   <li>・これまでの研究成果をまとめ、獣医学専攻全教員の前で発表し、その内容が博士論文としてふさわしいレベルに達しているかについて様々な角度から議論し、審査を受ける。</li> </ul>

## 【資料2】

### 定年退職する教員を特例として新大学で勤務する教員として 雇用する場合の取り扱いについて

令和2年8月26日 理事長決裁

#### (趣旨)

- 1 この要項は、特例として、新大学の完成年度までに定年退職する教員を雇用する場合の取り扱いについて定める。

#### (適用対象)

- 2 この要項の適用対象者（以下「本要項適用者」という。）は、新大学の完成年度までに定年退職する教員で、担当する授業科目の特性等から同一専門分野の後任を直ちに確保することが困難である等理事長が特に必要と認める者とする。

#### (定年退職後雇用する場合の身分等)

- 3 本要項適用者を雇用する場合の身分は特任教員とし、当該本要項適用者が担当する学部・学域・研究科において教育研究を行う。

#### (任期)

- 4 本要項適用者の任期は、当該本要項適用者が担当する学部・学域・研究科の完成年度までとする。

#### (その他)

- 5 本要項適用者の任期以外の事項については、本要項の適用を受けない特任教員と同様とする。

#### 附 則

この要項は、令和2年8月26日から施行する。

【資料3】

獣医学専攻 博士課程 履修モデル

(動物構造機能学分野)

1年次		2年次		3年次		4年次		単位 合計
科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
研究公正B	1	獣医科学演習	1	獣医科学特別演習2	1	獣医科学特別演習3	1	6
獣医科学特別研究1*	-	獣医科学特別研究1*	8	獣医科学特別研究2*	-	獣医科学特別研究2*	-	
アカデミックイングリッシュアドバンス	1	獣医科学ミニレビュウ	2	国際・国内インターンシップ	1			
獣医科学特別演習1	1	ニューロサイエンス特論	1	動物構造機能学特別講義A*	1			
自然科学特論	1	病態機能学特論	1					
統計学	1	機能形態学特論	1					
実験動物学特論	1							
分子病理学特論	1							
<b>8科目</b>	<b>7</b>	<b>6科目</b>	<b>14</b>	<b>4科目</b>	<b>3</b>	<b>2科目</b>	<b>7</b>	<b>31</b>

(獣医環境科学分野)

1年次		2年次		3年次		4年次		単位 合計
科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
研究公正B	1	獣医科学演習	1	獣医科学特別演習2	1	獣医科学特別演習3	1	6
獣医科学特別研究1*	-	獣医科学特別研究1*	8	獣医科学特別研究2*	-	獣医科学特別研究2*	-	
アカデミックイングリッシュアドバンス	1	獣医科学ミニレビュウ	2	国際・国内インターンシップ	1			
獣医科学特別演習1	1	感染症制御学特論	1	獣医環境科学特別講義A	1			
自然科学特論	1	食品科学特論	1					
統計学	1							
分子細菌学特論	1							
分子ウイルス学特論	1							
分子寄生虫学・免疫学特論	1							
<b>9科目</b>	<b>8</b>	<b>5科目</b>	<b>13</b>	<b>4科目</b>	<b>3</b>	<b>2科目</b>	<b>7</b>	<b>31</b>

(獣医臨床科学分野)

1年次		2年次		3年次		4年次		単位 合計
科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	科目名	単位	
研究公正B	1	獣医科学演習	1	獣医科学特別演習2	1	獣医科学特別演習3	1	6
獣医科学特別研究1*	-	獣医科学特別研究1*	8	獣医科学特別研究2*	-	獣医科学特別研究2*	-	
アカデミックイングリッシュアドバンス	1	獣医科学ミニレビュウ	2	国際・国内インターンシップ	1	獣医臨床科学特別講義B	1	
獣医科学特別演習1	1	先端獣医内科学特論2	1	獣医臨床科学特別講義A	1			
統計学	1	大動物臨床学特論	1					
先端獣医外科学特論1	1	生産獣医療学特論	1					
先端獣医内科学特論1	1							
<b>7科目</b>	<b>6</b>	<b>6科目</b>	<b>14</b>	<b>4科目</b>	<b>3</b>	<b>3科目</b>	<b>8</b>	<b>31</b>

(注) 科目名欄の下線は必須科目を示す。

\*複数年で単位取得

## 【資料4】

### 大阪公立大学大学院理学研究科・農学研究科・獣医学研究科研究倫理委員会設置要綱

#### (目的)

第一条 大阪公立大学大学院理学研究科・農学研究科及び獣医学研究科(以下「理学・農学・獣医学研究科」という)において、理学・農学・獣医学研究科に属する教員が行う人間を直接対象とした研究について、倫理的配慮が図られているか否かを審査することを目的とする。

#### (審査対象)

- 第二条 理学・農学・獣医学研究科において行おうとする研究に関して、申請者から申請された実施計画を審査対象とする。
- 2 研究成果の出版又は発表予定の内容について、倫理に関わるとして研究者から申請された場合も、前項と同様とする。

#### (倫理委員会の設置)

第三条 理学・農学・獣医学研究科に、研究倫理委員会(以下「倫理委員会」という。)を置く。

#### (倫理委員会の構成)

- 第四条 倫理委員会は、次に掲げる者で構成する。
- 一 理学研究科長・農学研究科長・獣医学研究科長から1名
  - 二 農学研究科教員3名(各専攻から1名)
  - 三 獣医学研究科教員1名
  - 四 理学研究科生物化学専攻教員1名
  - 五 生物実験系委員会(遺伝子組換え実験安全委員会、バイオリスク管理委員会 動物実験委員会)より各1名
  - 六 本学以外の研究者及び学識経験者の中から、研究科長が委嘱する者(若干名)
- 2 前項第六号の委員の任期は1年とする。これら委員に欠員を生じた場合は速やかに補充する。この場合における委員の任期は、前任者の残任期間とする。

#### (委員長及び副委員長)

- 第五条 倫理委員会には、委員長及び副委員長を置き、委員長は研究科長とし、副委員長は委員の互選とする。
- 2 委員長は、会議を統括し会議の議長となる。
  - 3 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故ある場合会務を代理する。



(倫理委員会の責務)

第六条 倫理委員会は、本要綱の対象となる事項に関して、定められた手続きを経た申請に対し、倫理的観点から審査する。審査するにあたり、特に次に掲げる点に留意しなければならない。

- 一 研究の対象となる個人の人権の擁護
- 二 被験者に理解を求め同意を得る方法
- 三 研究により生じる個人の不利益と学問上の利益又は貢献度の予測
- 四 社会への貢献

(会議)

第七条 倫理委員会は、委員長が招集し議長となる。

- 2 倫理委員会は、委員の三分の二以上が出席し、かつ第四条第1項第六号委員の一人以上の出席がなければ会議を開催することができない。
- 3 倫理委員会は、審査にあたり申請者の出席を求め、申請内容の説明を受け意見を聞くことができる。
- 4 倫理委員会の議事の決定、審査の判定は、出席委員の三分の二以上の同意を得なければならない。
- 5 委員が申請者である場合は、その委員は審査の判定に加わることができない。
- 6 判定は、次に掲げる表示による。
  - 一 承認
  - 二 条件付承認
  - 三 保留
  - 四 不承認
  - 五 非該当
- 7 委員長は、教育推進課農学研究科支援グループをして会議録を作成させ、審査の経過、判定及び出席委員の氏名を記載しなければならない。
- 8 会議録は、永年保存として農学研究科支援グループにおいて保存する。
- 9 倫理委員会の開催は、四半期ごとに必要に応じて行う。

(専門部会)

第八条 倫理委員会に、申請事項を審査させるため必要があるときは、専門部会を置くことができる。

- 2 専門部会委員等専門部会に関する事項は、倫理委員会で定めるものとする。

(申請手続き及び決定の通知)

第九条 理学・農学・獣医学研究科に所属する教員は、人間を対象とする研究に際して、倫理に関わる研究については、倫理委員会に実施計画又は研究成果若しくは発表予定の内容の審査を受けなければならない。

- 2 審査を申請しようとする者は、審査申請書(様式1号)に所要事項を記入し、委員長あて提出しなければならない。
- 3 委員長は、申請を受理したときは、速やかに審査を開始し、審査を終了したときは、審査結果通知書(様式2号)により、申請者に通知しなければならない。
- 4 前項の通知をするにあたっては、審査の結果が第七条第6項第二号、第三号、第四号の各号の一に該当する場合は、その理由を記載しなければならない。

(研究の実施状況等の報告)

第十条 研究責任者は、研究状況を年1回年度末に、実施状況報告書(様式3号)を委員長に提出するものとする。

- 2 研究責任者は、特段の事情により申請した研究を中止若しくは中断する場合、研究終了(中止・終了)報告書(様式4号)を委員長に提出するものとする。
- 3 研究責任者は、研究に関する新たな報告事項がある場合、新たな情報に関する報告書(様式5号)を委員長に提出するものとする。
- 4 委員長は、研究責任者から研究実施に関する報告を受けた時は、必要に応じ、本委員会にて報告するものとする。

(守秘義務)

第十一条 委員は、審査を行う上で知り得た情報を漏らしてはならない。委員の任期終了後もまた同様とする。

(庶務)

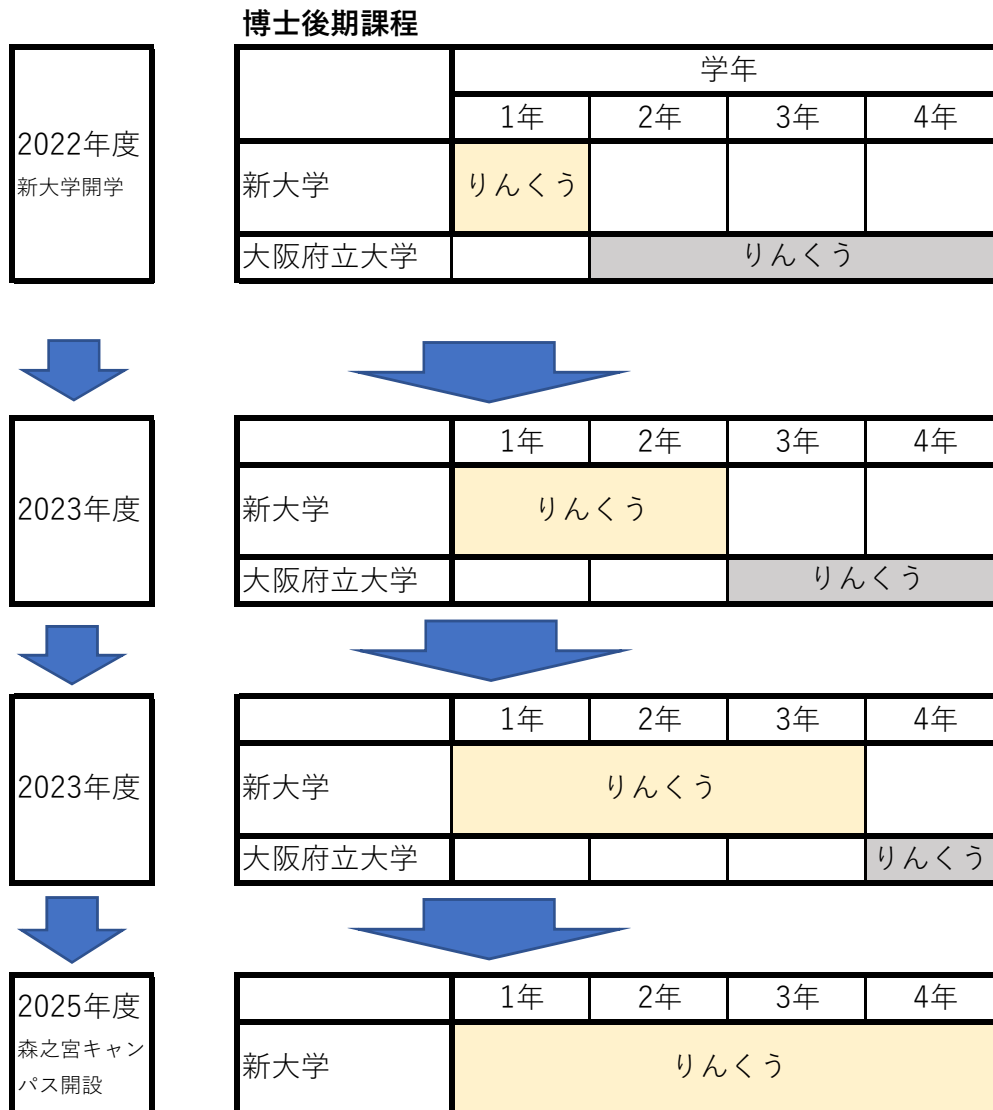
第十二条 倫理委員会に関する庶務は、農学研究科支援グループが行う。

(その他)

第十三条 この要綱に定めるもののほか、委員会の運営に関し必要な事項は、委員会が定める。

獣医学研究科キャンパスの遷移  
新大学

新キャンパス整備に伴う校地（教育実施場所）遷移について



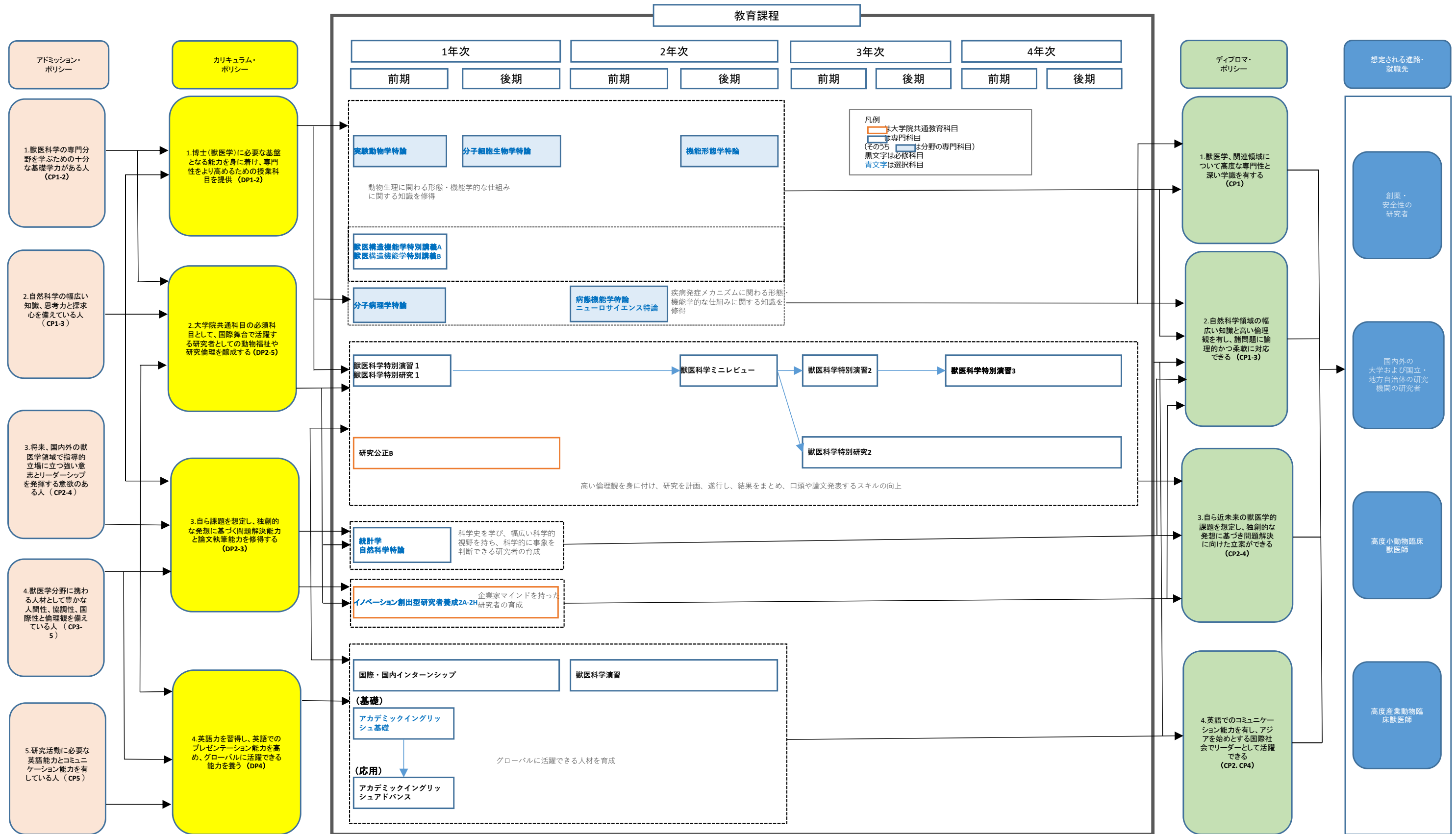
獣医学研究科 獣医学専攻 博士課程（動物構造機能学コース）カリキュラムマップ

【設置の趣旨・必要性】

○様々なストレスにあふれる現代社会において、動物が伴侶動物として家族の一員となるに伴い、動物医療の高度化が求められている。  
 ○国際交流の活性化に伴うヒトや動物の移動と物流の増大に起因する新興・再興感染症や人獣共通感染症の脅威、食用動物の多頭飼育に基づく動物由来感染症の増大、バイオテクノロジーを用いた畜産物の生産性の効率化や新薬の開発、またそれら食品・医薬品の安全性評価など地域社会の福祉や安全性にかかわる多様な問題が顕在化している。  
 ○ヒト、動物及び環境の健康と健全は3者が相まって初めて成立つというOne Health の概念が提唱され、獣医学への期待は益々高まる中、獣医学領域を取り巻くこれら諸問題に取り組み、解決できる世界に通用する高度専門家・研究者・教育者の養成が社会から求められているため獣医学研究科を設置する。

【養成する人材像】

本研究科では、動物医療を中心とし、動物生命科学から食の安全や人獣共通感染症等、いわゆる公衆衛生分野まで包含する学際的な研究・教育を行い、社会的要請が増加している動物バイオメディカル関連、食の安全及び人獣共通感染症を含めた獣医公衆衛生及び動物衛生、病態動物の診断・治療・予防などの分野において、幅広い視野と深い洞察力、及び高い倫理観を持ち、独創的指導能力を發揮できる国際的な専門家を育成することを目指す。特に、動物構造機能学コースでは、産業界やアカデミアで求められる高度研究者を養成することを目指している。



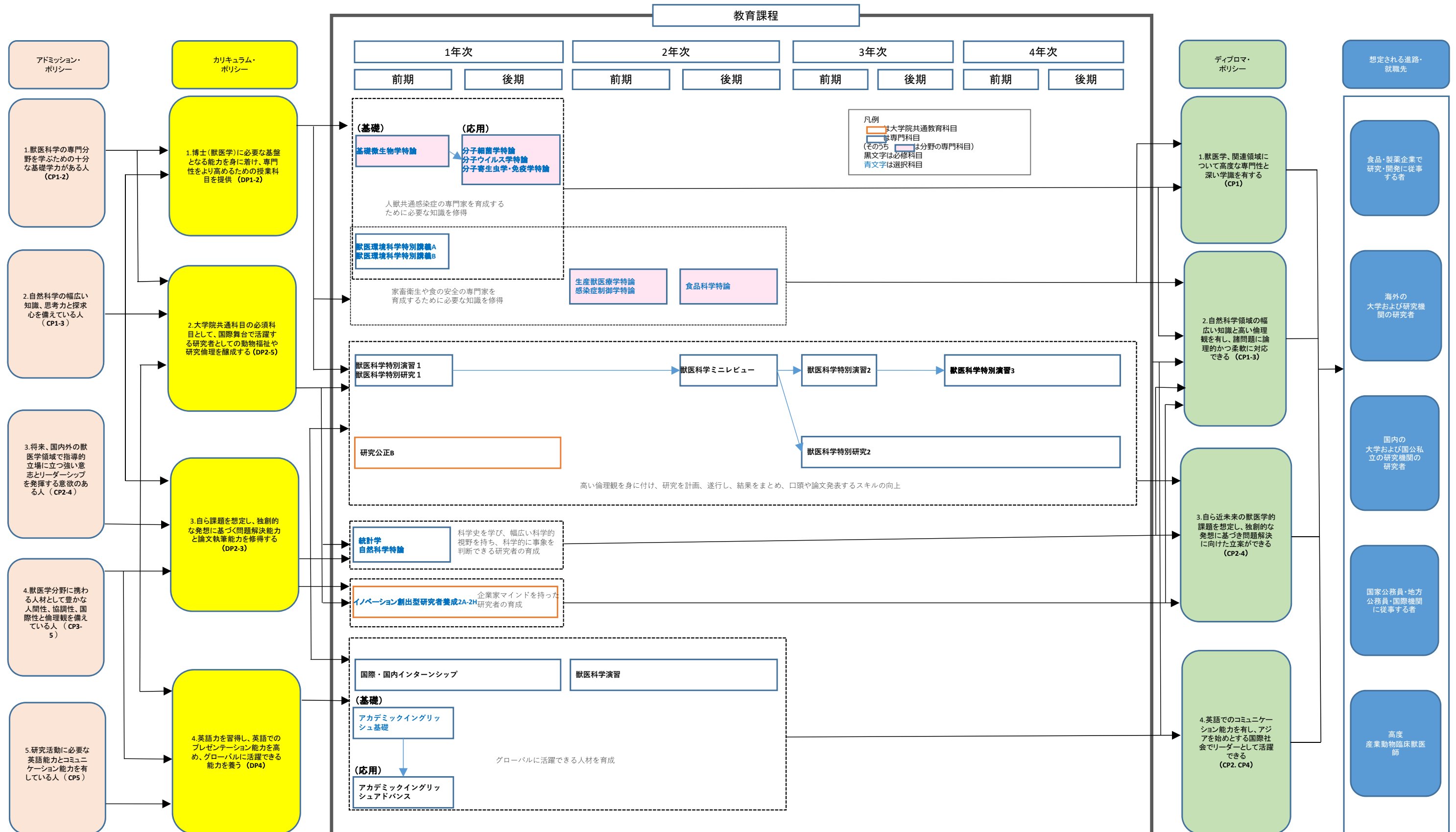
獣医学研究科 獣医学専攻 博士課程（獣医環境科学コース）カリキュラムマップ

【設置の趣旨・必要性】

○様々なストレスにあふれる現代社会において、動物が伴侶動物として家族の一員となるに伴い、動物医療の高度化が求められている。  
 ○国際交流の活性化に伴うヒトや動物の移動と物流の増大に起因する新興・再興感染症や人獣共通感染症の脅威、食用動物の多頭飼育に基づく動物由来感染症の増大、バイオテクノロジーを用いた畜産物の生産性の効率化や新薬の開発、またそれら食品・医薬品の安全性評価など地域社会の福祉や安全性にかかわる多様な問題が顕在化している。  
 ○ヒト、動物及び環境の健康と健全は3者が相まって初めて成立するというOne Health の概念が提唱され、獣医学への期待は益々高まる中、獣医学領域を取り巻くこれら諸問題に取り組み、解決できる世界に通用する高度専門家・研究者・教育者の養成が社会から求められているため獣医学研究科を設置する。

【養成する人材像】

本研究科では、動物医療を中心とし、動物生命科学から食の安全や人獣共通感染症等、いわゆる公衆衛生分野まで包含する学際的な研究・教育を行い、社会的要請が増加している動物バイオメディカル関連、食の安全及び人獣共通感染症を含めた獣医公衆衛生及び動物衛生、病態動物の診断・治療・予防などの分野において、幅広い視野と深い洞察力、及び高い倫理観を持ち、独創的指導能力を発揮できる国際的な専門家を育成することを目指す。特に、獣医環境科学コースでは、全ての授業を英語で学び、単位が取得できるインターナショナルコースとして開講し、人獣共通感染症、家畜衛生や食の安全の分野で活躍できる高度研究者、あるいは高度専門的職業人としての能力を持つ人を養成することを目指している。



獣医学研究科 獣医学専攻 博士課程（獣医臨床科学コース）カリキュラムマップ

【設置の趣旨・必要性】

○様々なストレスにあふれる現代社会において、動物が伴侶動物として家族の一員となるに伴い、動物医療の高度化が求められている。  
 ○国際交流の活性化に伴うヒトや動物の移動と物流の増大に起因する新興・再興感染症や人獣共通感染症の脅威、食用動物の多頭飼育に基づく動物由来感染症の増大、バイオテクノロジーを用いた畜産物の生産性の効率化や新薬の開発、またそれら食品・医薬品の安全性評価など地域社会の福祉や安全性にかかわる多様な問題が顕在化している。  
 ○ヒト、動物及び環境の健康と健全は3者が相まって初めて成立するというOne Health の概念が提唱され、獣医学への期待は益々高まる中、獣医学領域を取り巻くこれら諸問題に取り組み、解決できる世界に通用する高度専門家・研究者・教育者の養成が社会から求められているため獣医学研究科を設置する。

【養成する人材像】

本研究科では、動物医療を中心とし、動物生命科学から食の安全や人獣共通感染症等、いわゆる公衆衛生分野まで包含する学際的な研究・教育を行い、社会的要請が増加している動物バイオメディカル関連、食の安全及び人獣共通感染症を含めた獣医公衆衛生及び動物衛生、病態動物の診断・治療・予防などの分野において、幅広い視野と深い洞察力、及び高い倫理観を持ち、独創的指導能力を発揮できる国際的な専門家を育成することを目指す。特に、獣医臨床科学コースでは、愛玩動物に対するエビデンスに基づく獣医療に精通した高度専門的職業人を養成することを目指している。

